量子力学

第9回目(6/15)

2AM 前期木曜2限

先進工学部マテリアル創成工学科 田村隆治 tamura@rs.tus.ac.jp

認証コード: 4471

数演算子前の固有値

νの最小値をμとする。このとき以下の式が成り立つ。

$$\hat{a}|\mu\rangle = 0$$
 ※ $\hat{a}\Psi_{\mu} = 0$ と理解すれば良い。 $\hat{a}\Psi_{\mu}$ という状態は存在確率が ゼロなので、物理的に存在しない状態である。

両辺に \hat{a}^{\dagger} をかけると、 $|\mu\rangle$ は固有ケットなので固有値を有する。

$$\hat{a}^{\dagger}\hat{a}|\mu\rangle = \hat{N}|\mu\rangle = 0 = 0|\mu\rangle$$
 従って、 $\mu = 0$ 。 ν の最小値は 0 である。

以上より、数演算子心の固有関数と固有値は以下のように表される。

$$\widehat{N}|n\rangle = n|n\rangle$$
 $n = 0,1,2,3,4,\cdots$

※ 従って、一次元調和振動子の固有値は以下の式で与えられる。

$$E_n = \left(n + \frac{1}{2}\right)\hbar\omega$$
 2023.6.8

固有関数の規格化

 $|n\rangle$ が規格化されているとして $|n+1\rangle$ の規格化条件を求める。

$$\left\langle \hat{a}^{\dagger} n \middle| \hat{a}^{\dagger} n \right\rangle = \left\langle n \middle| \hat{a} \hat{a}^{\dagger} n \right\rangle = \left\langle n \middle| \left(\hat{a}^{\dagger} \hat{a} + 1 \right) n \right\rangle = (n+1)$$

$$|n+1\rangle = \frac{1}{\sqrt{n+1}}\hat{a}^{\dagger}|n\rangle$$

固有関数|n)の規格化

$|n+1\rangle = \frac{1}{\sqrt{n+1}}\hat{a}^{\dagger}|n\rangle$

先ほどの関係式を繰り返し用いよう。

$$|n\rangle = \frac{1}{\sqrt{n}} \hat{a}^{\dagger} |n-1\rangle = \frac{1}{\sqrt{n}} \hat{a}^{\dagger} \frac{1}{\sqrt{n-1}} \hat{a}^{\dagger} |n-2\rangle$$

$$= \frac{1}{\sqrt{n}} \hat{a}^{\dagger} \frac{1}{\sqrt{n-1}} \hat{a}^{\dagger} \frac{1}{\sqrt{n-2}} \hat{a}^{\dagger} |n-3\rangle = \cdots$$

$$= \frac{1}{\sqrt{n}} \hat{a}^{\dagger} \frac{1}{\sqrt{n-1}} \hat{a}^{\dagger} \frac{1}{\sqrt{n-2}} \hat{a}^{\dagger} \cdots \frac{1}{\sqrt{1}} \hat{a}^{\dagger} |0\rangle = \frac{1}{\sqrt{n!}} (\hat{a}^{\dagger})^{n} |0\rangle$$

数演算子前の固有値と固有関数

$$\widehat{N}|n\rangle = n|n\rangle$$

固有值: $n = 0,1,2,3,4,\cdots$

固有関数: $|n\rangle = \frac{1}{\sqrt{n!}} (\hat{a}^{\dagger})^n |0\rangle$

※下に示すように、 |n)はそのまま ハミルトニアンの固有関数になる。

※基底状態|0)さえ求めておけば、 â[†]を次々と作用させることで全ての 固有状態が得られる。

ハミルトニアンĤの固有値

$$\widehat{H}|n\rangle = \hbar\omega\left(\widehat{N} + \frac{1}{2}\right)|n\rangle = \hbar\omega\left(n + \frac{1}{2}\right)|n\rangle$$
 $E_n = \left(n + \frac{1}{2}\right)\hbar\omega$

$$E_n = \left(n + \frac{1}{2}\right)\hbar\omega$$

基底状態|0)の導出

$$\hat{a}|0\rangle = 0$$

$$\therefore \left(m\omega x + \hbar \frac{d}{dx}\right) \Psi_0 = 0 \qquad \therefore \frac{d\Psi_0}{dx} = -\frac{m\omega x}{\hbar} \Psi_0$$

$$: \Psi_0 = Ce^{-\frac{m\omega}{2\hbar}x^2}$$
 一次元調和振動子の基底状態

基底エネルギーE₀

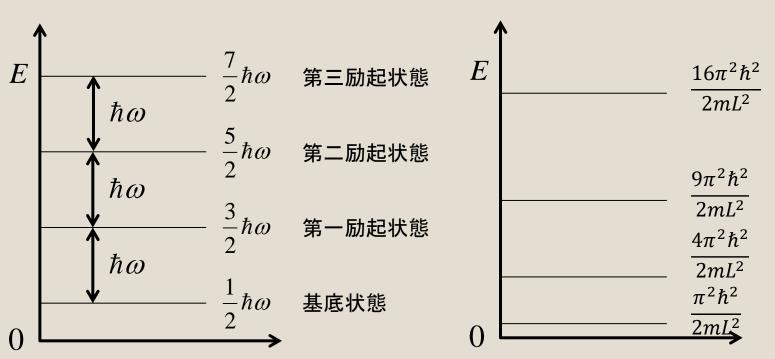
- ※このように原子は絶対零度でも振動している。これを零点振動という。
- ※基底状態 $|0\rangle$ のことを「真空」とよぶことがある。このとき、 \hat{a}^{\dagger} は真空にエネルギー $\hbar\omega$ をもった量子を一つ生み出す演算子、逆に \hat{a} は量子を一つ消す演算子とみることができる。 \hat{a}^{\dagger} を生成演算子、 \hat{a} を消滅演算子とよぶのはこのためである。
- ※ $\hat{N} \equiv \hat{a}^{\dagger} \hat{a}$ が数演算子と呼ばれるのは、量子の数を与える演算子だからである。

一次元調和振動子のエネルギー固有値

$$E_n = \left(n + \frac{1}{2}\right)\hbar\omega \qquad n = 0, 1, 2, \dots$$

井戸型ポテンシャルの場合

$$E_n = \frac{n^2 \pi^2 \hbar^2}{2mL^2} = \frac{n^2 h^2}{8mL^2}$$



※古典力学では、振動エネルギーは振幅の二乗に比例し、振幅は連続的な値を とるのに対し、量子力学では振動エネルギーは不連続となる。

一次元調和振動の固有状態

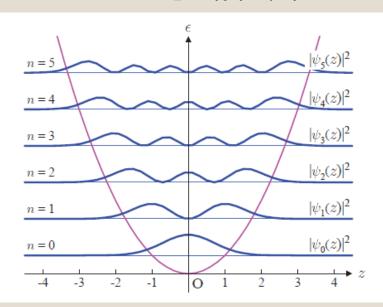
固有関数:
$$|n\rangle = \frac{1}{\sqrt{n!}} (\hat{a}^{\dagger})^n |0\rangle$$

固有値:
$$E_n = \left(n + \frac{1}{2}\right)\hbar\omega$$
 $n = 0,1,2,...$

n=0~5のときの存在確率

基底状態
$$\Psi_0(x) = e^{-\frac{m\omega}{2\hbar}x^2}$$
 第一励起状態
$$\Psi_1(x) = xe^{-\frac{m\omega}{2\hbar}x^2}$$
 第二励起状態
$$\Psi_2(x) = \left(x^2 - \frac{\hbar}{2m\omega}\right)e^{-\frac{m\omega}{2\hbar}x^2}$$
 第三励起状態
$$\Psi_3(x) = \left(x^3 - \frac{3\hbar}{2m\omega}x\right)e^{-\frac{m\omega}{2\hbar}x^2}$$

※ただし、規格化していない。



※エネルギーが高くなるにつれ、粒子の存在確率が外部に拡がっていく様子がわかる。

例題:一次元調和振動子の基底状態の固有関数 $\Psi_0(x) = Ce^{-\frac{m\omega}{2\hbar}x^2}$ を規格化せよ。(10分)

積分公式
$$\int_{-\infty}^{\infty} e^{-ax^2} dx = \sqrt{\frac{\pi}{a}}$$
 を用いよ。

例題:基底状態の固有関数 $\Psi_0(x) = Ce^{-\frac{m\omega}{2\hbar}x^2}$ を規格化せよ。(10分)

規格化条件
$$\int_{-\infty}^{\infty} |\Psi_0|^2 dx = 1$$

$$a = \frac{m\omega}{2\hbar} \ge \sharp v \tau$$

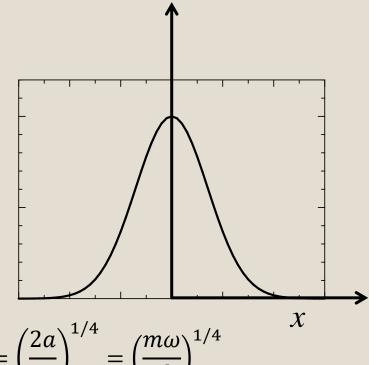
$$\int_{-\infty}^{\infty} |\Psi_0|^2 dx = |\mathcal{C}|^2 \int_{-\infty}^{\infty} e^{-2ax^2} dx = 1 \quad \Psi$$

積分公式
$$\int_{-\infty}^{\infty} e^{-ax^2} dx = \sqrt{\frac{\pi}{a}}$$
 より、

$$|C|^2 \int_{-\infty}^{\infty} e^{-2ax^2} dx = |C|^2 \sqrt{\frac{\pi}{2a}} = 1, \therefore C = \left(\frac{2a}{\pi}\right)^{1/4} = \left(\frac{m\omega}{\pi\hbar}\right)^{1/4}$$

規格化された固有関数

$$\Psi_0 = \left(\frac{m\omega}{\pi\hbar}\right)^{1/4} e^{-\frac{m\omega x^2}{2\hbar}}$$



第9回目で学ぶ内容

一粒子の調和振動の応用として、2原子分子および 固体の振動について学ぶ。

これまでのまとめ

一次元調和振動子

エネルギー固有関数:
$$|n\rangle = \frac{1}{\sqrt{n!}} (\hat{a}^{\dagger})^n |0\rangle$$

エネルギー固有値:
$$E_n = \left(n + \frac{1}{2}\right)\hbar\omega$$
 $n = 0,1,2,\cdots$

粒子が固有状態nをとる確率(一般論)

$$P(E_n) = rac{1}{z} \exp\left(-rac{E_n}{k_B T}
ight)$$
 確率なので、 $\sum_{n=0}^{\infty} P(E_n) = 1$ 従って、 $z = \sum_{n=0}^{\infty} \exp\left(-rac{E_n}{k_B T}
ight)$

※ zは一粒子分配関数とよばれる。分配関数については後で説明する。

一次元調和振動子の場合

$$E_{n} = \left(n + \frac{1}{2}\right)\hbar\omega \qquad n = 0,1,2,\dots$$

$$z = \sum_{n=0}^{\infty} \exp\left(-\frac{(n+1/2)\hbar\omega}{k_{B}T}\right) = \exp\left(-\frac{\hbar\omega}{2k_{B}T}\right) \sum_{n=0}^{\infty} \exp\left(-\frac{n\hbar\omega}{k_{B}T}\right) = \frac{\exp(-\hbar\omega/2k_{B}T)}{1 - \exp(-\hbar\omega/k_{B}T)}$$

$$\therefore \frac{1}{z} = \frac{1 - \exp(-\hbar\omega/k_{B}T)}{\exp(-\hbar\omega/2k_{B}T)} = e^{\hbar\omega/2k_{B}T} \left(1 - e^{-\hbar\omega/k_{B}T}\right)$$
※等比数列の和

※絶対零度では粒子は基底状態(エネルギー最低状態)にある。有限の温度では、 粒子は励起状態をしめるようになる。

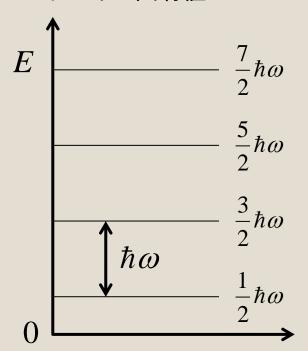
状態 $|n\rangle$ をとる確率: $P(E_n) = (1 - e^{-\hbar\omega/k_BT}) e^{-n\hbar\omega/k_BT}$

基底状態 $|0\rangle$ をとる確率: $P(E_0) = 1 - e^{-\hbar\omega/k_BT}$

XH分子の振動



エネルギー固有値



$$k = 500 \text{ N/m}$$
 $\hbar = 1.05 \times 10^{-34} Js$
 $m = 1.7 \times 10^{-27} \text{ kg}$

X原子を十分重いと見なし、一粒子の調和振動として扱おう。

エネルギー間隔
$$\hbar\omega = \hbar\sqrt{\frac{k}{m}} = 5.7 \times 10^{-20} \text{ J} = 0.36 \text{ eV}$$

 $300k_B = 4.1 \times 10^{-21}$ J = 0.026 eV

粒子が基底状態 |0)にいる確率

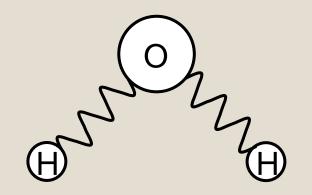
$$P(E_0) = 1 - e^{-\frac{\hbar\omega}{k_BT}} = 1 - e^{-\frac{5.7 \times 10^{-20}}{4.1 \times 10^{-21}}} = 0.999999$$

室温で励起されている分子は、100万分子のうち1分子。一般に、分子振動は室温では基底状態にあると考えて問題ない。

室温

H₂O分子の振動

※分子振動は一般に基底状態にある。ここでは、 光のエネルギーを受け取って基底状態から第一励 起状態に遷移するための必要条件を考える。



エネルギー保存則

O原子が十分重いと近似

振動エネルギーの間隔 $h\nu_o=$ フォトンのエネルギー $h\nu_p$ $k\approx 500 \text{ N/m}$ $m=1.7\times 10^{-27} \text{ kg}$

$$\therefore \nu_p = \nu_o$$

吸収波長
$$\lambda = \frac{c}{\nu_p} = \frac{c}{\nu_o} = 2\pi c \sqrt{\frac{m}{k}}$$
 $v_o = \frac{1}{2\pi} \sqrt{\frac{k}{m}}$

$$\therefore \lambda = 2\pi \times 3.0 \times 10^8 \sqrt{\frac{1.7 \times 10^{-27}}{500}} = 3.48 \times 10^{-6} = 3.5 \ \mu \text{m}$$

水分子は赤外線を吸収。

※人体の大部分(約60%)を占めるのは水でなので、人間を温める目的には、 波長数μmの赤外線が最も適している。

分子が吸収する赤外線の波長は力の定数kで決まる。

※赤外分光法:赤外線の吸収波長から分子を同定する手法

2原子分子の並進と振動

2原子分子の運動エネルギー

2原子分子の運動エネルギー $E_K = \frac{M}{2}\dot{x}_G^2 + \frac{\mu}{2}\dot{x}^2$

ハミルトニアン
$$\widehat{H} = -\frac{\hbar^2}{2M} \frac{d^2}{dx_G^2} - \frac{\hbar^2}{2\mu} \frac{d^2}{dx^2} + V(x - x_0)$$
 x_0 : 平衡距離

時間に依存しないS.E.
$$\widehat{H}\Psi(x_G,x) = E\Psi(x_G,x)$$

2原子分子の並進と振動

変数分離形を仮定 $\Psi(x_G,x) = \phi(x_G)\varphi(x)$

$$\left[-\frac{\hbar^2}{2M} \frac{d^2}{dx_G^2} - \frac{\hbar^2}{2\mu} \frac{d^2}{dx^2} + V(x - x_0) \right] \phi(x_G) \phi(x) = E \phi(x_G) \phi(x)$$

変形して、

$$-\frac{\hbar^2}{2M}\frac{1}{\phi(x_G)}\frac{d^2}{dx_G^2}\phi(x_G) = \frac{\hbar^2}{2\mu}\frac{1}{\varphi(x)}\frac{d^2}{dx^2}\varphi(x) - V(x - x_0) + E$$

左辺は x_G のみの関数、右辺はxのみの関数。あらゆる x_G 、xについて成り立つためには、両辺とも定数でなければならない。そこで定数を E_1 とおく。

$$-\frac{\hbar^2}{2M}\frac{d^2}{dx_G^2}\phi(x_G) = E_1\phi(x_G)$$

質量 $M=m_1+m_2$ の粒子の並進運動を表す。(学習済み)

$$\left[-\frac{\hbar^2}{2\mu}\frac{d^2}{dx^2} + V(x - x_0)\right]\varphi(x) = E_2\varphi(x)$$
 換算質量 μ を持った1粒子の
振動を表す。(学習済み)
 $:: E_2 \equiv E - E_1$

※エネルギー固有値Eは、並進の固有値 E_1 と振動の固有値 E_2 の和となる。

2原子分子の並進と振動

$$-\frac{\hbar^2}{2M}\frac{d^2}{dx_G^2}\phi(x_G) = E_1\phi(x_G) \qquad \qquad$$
 固有関数: $\phi = e^{ikx_G} - \infty < k < \infty$ エネルギー固有値: $E_1 = \frac{\hbar^2 k^2}{2M}$
$$\left[-\frac{\hbar^2}{2\mu}\frac{d^2}{dx^2} + V(x - x_0) \right] \varphi(x) = E_2\varphi(x) \quad E_2 \equiv E - E_1$$

変数変換 $x' \equiv x - x_0$

$$\left[-\frac{\hbar^2}{2\mu} \frac{d^2}{dx'^2} + V(x') \right] \varphi(x' + x_0) = E_2 \varphi(x' + x_0) \qquad \because dx' = dx$$

 $\Psi(x') \equiv \varphi(x' + x_0)$ とおき、次いで変数 x'をxにもどすと、

※これは一粒子の時間に依存しないS.E.に他ならない。

エネルギー固有値:
$$E_2=\left(n+\frac{1}{2}\right)\hbar\omega$$
 $n=0,1,2,\cdots$ $\omega=\sqrt{\frac{k}{\mu}}$ 全エネルギー: $E=E_1+E_2=\frac{\hbar^2k^2}{2M}+\left(n+\frac{1}{2}\right)\hbar\omega$

%2原子分子の振動エネルギーの固有値は、換算質量 μ をもった1粒子の振動エネルギーの固有値に等しい。

N₂分子の振動

換算質量
$$\mu = \frac{m_1 m_2}{m_1 + m_2}$$

力の定数: $k = 2290 \, \text{N/m}$ 原子量:14

換算質量(原子量単位)
$$\mu = \frac{14 \times 14}{14 + 14} = 7$$
 $\mu = \frac{7 \times 10^{-3}}{6.02 \times 10^{23}} = 1.16 \times 10^{-26}$ kg

$$\omega = \sqrt{\frac{k}{\mu}} = \sqrt{\frac{2290}{1.16 \times 10^{-26}}} = 4.44 \times 10^{14} \text{ /sec}$$

$$: h = 1.05 \times 10^{-34} \text{ Js}$$

エネルギー間隔: $\hbar\omega = 4.66 \times 10^{-20} \text{ J} = 0.291 \text{ eV}$

$$k_B = 1.38 \times 10^{-23} \text{ J/K}$$

熱エネルギー(室温): $300k_B = 4.14 \times 10^{-21} J = 0.0258 eV$

固有状態nの占有確率

$$P(E_n) = \left(1 - e^{-\hbar\omega/k_B T}\right) e^{-n\hbar\omega/k_B T}$$

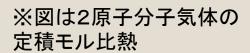
基底状態と第一励起状態の占有確率

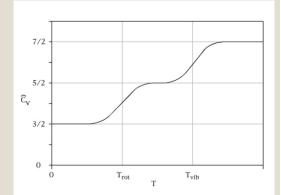
$$P(E_0) = 1 - e^{-\hbar\omega/k_BT} = 1 - e^{-\frac{0.291}{0.0258}} = 0.99999$$

$$P(E_1) = \left(1 - e^{-0.291/0.0258}\right) e^{-0.291/0.0258} = 0.00001$$

第一励起状態にある分子は、10万分子に1分子。

室温では、N₂分子は振動の基底状態にある。





地球温暖化の原因

地球放射のピーク波長(地球全体の平均温度15℃とする)

ウィーンの変位則より、
$$\lambda_m = \frac{2.90 \times 10^{-3}}{273 + 15} = 10 \ \mu \text{m}$$

地球の黒体放射は10μm付近にピークをもつ。

CO₂分子の振動

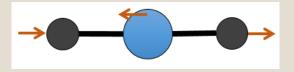
吸収波長

逆対称伸縮モード(2349 cm⁻¹)

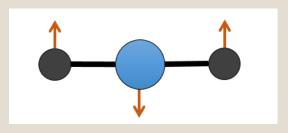
$$\lambda = \frac{1}{2349 \times 100} = 4.26 \times 10^{-6} \text{ m} = 4.26 \text{ }\mu\text{m}$$

変角モード(667 cm⁻¹)

$$\lambda = \frac{1}{667 \times 100} = 1.50 \times 10^{-5} \text{ m} = 15.0 \text{ }\mu\text{m}$$



逆対称伸縮モード(2349 cm⁻¹)



変角モード(667 cm⁻¹)

 CO_2 分子は波長が $4.3\mu m$ および $15\mu m$ の赤外線を吸収する

CO₂分子の吸収波長が地球放射のピーク波長に近いことが 地球温暖化の原因(と考えられる)

固体の比熱(再考)

※アドバンスな内容

【統計力学】温度Tの体系がエネルギー E_n の量子状態をとる確率は、

$$P(E_n) = \frac{1}{Z} \exp\left(-\frac{E_n}{k_B T}\right)$$
で与えられる。 $Z = \sum_{n=0}^{\infty} \exp\left(-\frac{E_n}{k_B T}\right)$

※ここでは、1個の粒子でなく多数の粒子からなる系のエネルギーを考える。

エネルギー期待値
$$E = \sum_{n=0}^{\infty} E_n P(E_n)$$
 ただし、 $P(E_i) = \frac{\exp(-E_i/kT)}{\sum_{n=0}^{\infty} \exp\left(-\frac{E_n}{k_BT}\right)}$

※一粒子の場合は観測値は期待値と一致しない。しかし、粒子数が多いと観測値は期待値と 一致する。なぜか。サイコロを十分多数回振れば出る目の平均値は厳密に3.5になる。理由は 粒子数が増加するにつれ、分散(期待値からのずれ)がいくらでもゼロに近づけることができる からである(大数の法則)。以上より、多粒子系の観測量は期待値に等しい。

$$:: \beta \equiv \frac{1}{k_B T}$$

エネルギー期待値
$$E = \frac{1}{Z} \sum_{n=0}^{\infty} E_n e^{-\beta E_n} = -\frac{\partial}{\partial \beta} \ln \left(\sum_{n=0}^{\infty} e^{-\beta E_n} \right) = -\frac{\partial}{\partial \beta} \ln Z$$

エネルギー
$$E = -\frac{\partial}{\partial \beta} \ln Z$$
 定積比熱 $C_v = \frac{dE}{dT}$ ※系の大きさ

$$C_v = \frac{dE}{dT}$$

ればよい。

※分配関数Zを求めることが、エネルギーや比熱の計算の出発点となる。

N個の独立した調和振動子からなる系

i番目の調和振動子の量子数を n_i とすると、全エネルギーは、

※互いに独立した振動子を考えているので、全エネルギーはそれぞれの 振動子のエネルギーの和になる。

分配関数はすべての状態に関する和をとることで求まる。

$$Z = \sum_{n_1=0}^{\infty} \sum_{n_2=0}^{\infty} \dots \sum_{n_N=0}^{\infty} \exp(-\beta E_{n_1,n_2,n_1,\dots,n_N})$$

$$= \sum_{n_1=0}^{\infty} \exp(-\beta E_{n_1}) \sum_{n_2=0}^{\infty} \exp(-\beta E_{n_2}) \dots \sum_{n_N=0}^{\infty} \exp(-\beta E_{n_N}) = z^N$$

ただし、
$$z \equiv \sum_{n=0}^{\infty} \exp(-\beta E_n)$$
 一個の振動子の分配関数

系のエネルギーは、

$$E = -\frac{\partial}{\partial \beta} \ln Z = -N \frac{\partial}{\partial \beta} \ln z$$
 $t = \frac{\exp(-\hbar \omega/2k_B T)}{1 - \exp(-\hbar \omega/k_B T)}$

固体の比熱(再考):アインシュタイン模型

1モル $(N_A$ 個)の原子からなる固体を考え、各原子はx,y,z方向に同じ角振動数 ω で調和振動を行うものとする。

※原子間の相互作用を考えないこのモデルはアインシュタイン模型とよばれる。

 $3N_A$ 個の調和振動子があるので、分配関数は、

固体の振動エネルギーは、

$$E = -\frac{\partial}{\partial \beta} \ln Z = -3N_A \frac{\partial}{\partial \beta} \ln z = -3N_A \frac{\partial}{\partial \beta} \ln \frac{\exp\left(-\frac{\hbar\omega\beta}{2}\right)}{1 - \exp(-\hbar\omega\beta)}$$

$$= -3N_A \frac{\partial}{\partial \beta} \left[\ln\exp\left(-\frac{\hbar\omega\beta}{2}\right) - \ln\left(1 - \exp(-\hbar\omega\beta)\right) \right]$$

$$= 3N_A \frac{\partial}{\partial \beta} \left[\frac{\hbar\omega\beta}{2} + \ln\left(1 - \exp(-\hbar\omega\beta)\right) \right] = 3N_A \left[\frac{\hbar\omega}{2} + \frac{\hbar\omega\exp(-\hbar\omega\beta)}{1 - \exp(-\hbar\omega\beta)} \right] = \frac{3N_A}{2} \hbar\omega + \frac{3N_A\hbar\omega}{\exp(\hbar\omega\beta) - 1}$$

固体の定積比熱は、

$$C_{V} = \frac{dE}{dT} = \frac{d\beta}{dT} \frac{d}{d\beta} \left[\frac{3N_{A}}{2} \hbar\omega + \frac{3N_{A}\hbar\omega}{\exp(\hbar\omega\beta) - 1} \right] = \frac{1}{k_{B}T^{2}} \frac{3N_{A}(\hbar\omega)^{2} \exp(\hbar\omega\beta)}{(\exp(\hbar\omega\beta) - 1)^{2}} \quad \because \beta \equiv \frac{1}{k_{B}T}$$

$$= 3N_{A}k_{B} \left(\frac{\hbar\omega}{k_{B}T} \right)^{2} \frac{\exp(\hbar\omega/k_{B}T)}{(\exp(\hbar\omega/k_{B}T) - 1)^{2}} \quad \mathcal{T} \land \mathcal{D} \Rightarrow \mathcal{D}$$

第9回目のまとめ

以下の内容を良く消化して、人に説明できるようにしましょう。

一次元調和振動子

エネルギー固有関数:
$$|n\rangle = \frac{1}{\sqrt{n!}} (\hat{a}^{\dagger})^n |0\rangle$$

エネルギー固有値:
$$E_n = \left(n + \frac{1}{2}\right)\hbar\omega$$
 $n = 0,1,2,...$

レポート課題(20分)

- 1. アインシュタインの比熱式において、 $T \to \infty \geq T \to 0$ のときの値を求めよ。
- 2. $T \to \infty$ のときの比熱の値はどのように理解できるか。

ヒント>>tamura@rs.tus.ac.jpまで

※提出方法

〆切:6/21(水) 提出先:LETUS

フォーマット:手書き・ワープロいずれも可

ファイル形式: PDF ファイル名書式: "82xxxxx材料太郎.pdf"